

## 昔の春

土田龍太郎

色好みの名に立てるをのこ世々に少からず。かの光源氏のこのみちにさらにたぐひなきはさることなれども、作り物語のうへにてこそことごとしき名を得たりしか、現しみの人にはあらざること交野の少將に異らざればここに數へでもありなむかし。

うへなき色好みとてまぎれなきは、伊勢物語の昔男、在原業平朝臣ならではあるべからず。平中とて好きごとに名を得たる平貞文のこと、草子にて見るにをこなるかたまさりてさしも心深しとおぼえねば、在中將にはなほいたく劣りぬべし。

この中將のもの言ひかけしをみないとあまたにて、およびもて數ふるにいとなかるめれども、あてにやむことなきかたとしては、伊勢の齋の宮と二條の后にかぎらでやはあるべき。水尾の帝の女御に立ちたまひて陽成院を産みまゐらせたまへりし藤原高子のこと、二條の后と世に申しならはしたるは、御父長良卿の二條にありし住み所もて里邸としたまひしがゆゑなるべし。この后を慕ひきこえてうまざりし昔男のひたぶる心をしづめかねてをりをりに詠み出でける大和歌、伊勢物語と古今集にそこら載りたり。これかれの歌のゆゑよししさいありげなれども、とかう確めむによしなくてただ草子地と詞書のみ見ておろろはかり思はむほかにすべなければおぼつかなきこといはむかたなし。

この后と在中將の仲らひあやしくおぼめかしきこと少からず。おほかた御后がねにただ人の懸想したてまつることはばかりなくてありなむやは。かの薄雲の女院と光源氏にありけるものまぎれ、まことこの后と在中將にもありたりとせば、罪避りがたかりぬべし。さはれこのことよしやうつにありたりとも、なほ女御入内には先立てりとおぼゆれば中將の罪さまでは重からざるにや。二條の后のこと世々の物知り人のあげつらひこちたけれどもこと長ければここに説かでもありなまし。さはいへど、昔男の五條わたりにしのでかよひきこえし去年の春を思ひ出でて詠めりける歌のめでたきことたとしへなければ、これにつきてわが年ごろ考ふることかたはしばかりだにも言はでやみなましかばなかなか腹ふくるるわざならましとおぼゆるままに、この一首のこといささか述べおくなり。

二條の后いまだ内に參らで、しばしがほど五條の太后おはしませしところの西の對に住みたまひけるころ、昔男のわざとにしもあらねどかしこに參りて後、しのびやかにもの言ひかはしきこゆることありけり。年代りて睦月ばかりに、女君の五條よりほかいづくともなく移りたまひにけるは、この時にはかに女御入内ありけるにや、はた御父長良卿の二條邸に還りたまひけるにや。その移りたまひけるころ、男たえて知らざりしにもあらざりけれど行きかよふによすがなければ、ただうしとのみ思ひくして日を過すほかせむすべなかりけり。またの年の春、梅の花さかりに咲きて月いとおもしろき夜、去年の戀しきままに、かの同じ西の對におもむきてくまぐまたづねたれども、わが思ひきこゆる人かげだにもあるべきにあらざれば、去年のこよひには似るべくもなし。あばらなる板じきにふせりて、月すでにかたぶきて夜のほのぼのと明るころにぞ泣く泣く歸りけるとぞ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

とてその夜はに昔男の詠めりける歌、調べいと高く言葉のつづきなだらかにめでたくして、よせいたへなることいはむかたなし。古今集の假名序に貫之ぬしのいはゆる六歌仙の歌のさまを述ぶるところに、在原業平はその心あまりて言葉たらず、しぼめる花のにほひのこれるがごとしと記して、この月やあらぬの一首をも引かれたるはむべことわりなりとぞ言ひつべき。言葉のたらざるは咎にあらず。まこといみじき大和歌の言葉たらへるはかへりてまれならざらめやは。

月やあらぬの歌なにとやらむおぼめかしくて、昔男の心ただちには捉へがたし。これぞげに在中將の歌の詠みざまの言葉たらざるがゆゑなるらむかしとおぼゆるものから、しばらく歌のおもてをただ文字のままに辿りたらむには、一首のおもむきおほよそ左のごとくに解くをうべからむ。月は去年の月にあらざるやいなや、春は昔の春にあらざるやいなや、さらに知りがたし。ただわが身ひとつばかり去年のままなれどもすべてのことの變りはてぬるやうにおぼゆるはわが慕ひきこゆる人のはやここにはおはしまさぬがゆゑならむかし。かく解かば歌のおもむきひとわたりはさることなきこえてさしも誤たざるにいたり。近き世の諸注にはかく解けるもの少からず。さはれかくばかりにてやみなましかば、よせいなきがごとなればさうさうしくて心ゆかざらまし。この歌の深きおもむきを究めむに、その要としては上の句のや文字二つと終りの七文字もとの身にしてとの解きやうのいかににありとこそいひつべけれ。これにつきて古き注釋家たちの説くところまちまちにて、いづれあたれりともとみには定めがたし。それをさながらここに論はむはいとくだくたくてやうなかるべければ、ただ一つ二つばかりを引きて言はばことたりなむ。契沖阿闍梨の臆斷に述べられたること詳かなれどもおほつかなきところなきにしもあらず。この法師、一首の心をば、月も春も昔に變らねどわれはすでに昔のごとくにはあらず、と解かれたるがごとし。藤井高尚ぬしの新釋に師說として引かれたるは鈴屋翁の説なれども、末の四文字の身にしてと言へるは身ながらの意にてかくとぢめたるところにわが身さへ昔のやうにもあらずといふ思ひこもれりとなむこの翁の言はれしとぞ新釋には記されたる。されば鈴屋翁の説、契沖阿闍梨の述べられしところにさまで異らざるにいたり。

この阿闍梨の臆斷に先立ちて世に出でし伊勢物語註のたぐひなきにあらねども、それらをばこのごろの物學びする人どもさして重んぜざるがごとし。さはれかの牡丹花老人のものせる肖聞抄に記せることここに引かみやみなむはいとかたほなるべし。かの抄に曰ふやう、后にあひたてまつらねば、月もあらぬ月におぼえ、春も昔の春ともおぼえず、わが身ももとの身とも思はぬよしなり、それを言はむとすれば三十一文字かぎりあればそのままにてもたせておくところ、心あまりて詞はたらずの心なり、この歌なほ言語の及ぶところにあらずとぞ。かく説かれたる肖柏翁げにかの春の夜の業平朝臣の心をよく悟りえたりと言はでやはあるべき。まことこの翁の考ふるごとくに、月と春のみかは、わが身さへもとの身にはあらずてふことを、在中將のただ文字の上ばかりにて、わが身ひとつはもとの身にしてと詠まれたりとせば、文字のうへとまことの心の中とうらうへなれば、これげに倒しま言と見ではあるべからず。さればかの富士谷御杖ぬしの唱へられし諷歌倒語の説をこの歌にあて用ゐむもまた苦しからざるにや。

すべてはありしままながら、しかもありしにもあらず見ゆるとき、わが身ひとつはもとの身のごとくなれどもまことはしからず。そのゆゑはなにぞと問はば、わが慕ひきこえてやまざる人のはいまさぬがゆゑなりとこそ答へめ。ただわが戀ふる人のありなしにて春のけしきもわが心も去年に似るべくもあらずなりたり。ありし人の今ここになきはえ避らぬ時の移ろひにほかならず。おほかたものと人をつねに移り變らでやまざること、そのもとゆゑをきはめもてゆかばつひに時の移ろひてふひとことに思ひ至らではあるべからず。昔を今になすよしのなければ、生きとし生けるものたれかは流れて止まぬ時の力にえ抗ふべけむや。わが戀ふる人のありなしさへまたこのことわりのほかに出でざるなり。

古今集の戀の部に入りたる月やあらぬの一首、戀の歌とてまた上もなくめでたきはいふもさらなり。あやなき戀のせちなる思ひにえ耐へで、おのが心のかつはゆくへも知らずあくがれゆき、かつは時の移ろひのあやしきにおどろかるること、この歌の言の葉にしるくはあらはれで、ただはかなきなごりのみはつかに聞ゆるは、げにしをれたる花のにほひのこれるがごとしとぞ言ひつべき。いと卓れたる戀の戀のみを歌ひてやむべけむやは。戀を歌ひてしかも戀のうへにこえ出でたらむこそまこといみじき戀の歌なるらめ。

(平成二十九年四月十日受附)